

RSK山陽放送ラジオ朝耳らじお5・5 二〇二一年五月三十一日  
「永瀬清子の光を受けて」 vol. 3

## 揺れさだまる星

小林章子（RSKアナウンサー）

白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林 「朝耳らじお5・5」では、第三月曜日のお昼過ぎに「永瀬清子の光を受けて」というコーナーがありまして、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力をお伝えしていますが、今日はこの時間のリスナーの皆さんにも、永瀬さんの作品の魅力をお楽しみいただきたいと思えます。永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしゃる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんとお電話がつながっています。白根さん、おはようございます。

白根 おはようございます。

小林 赤磐市松木にある永瀬清子さんの生家では、老朽化が目立っていた離れと台所が入る別棟の保存工事が完了して、今月から一般公開が始まっていますね。

白根 はい。私が初めて老朽化した離れや台所を見せていただいたのは二〇〇五年でした。それから言えば、見違えるほどすっかりきれいに明るくなっています。

小林 そうなんです。

白根 六月半ば頃には、生家のある松木の辺りで、田に水を引き田

植えが始まります。そこで、今日は永瀬清子さんが、田に水を引いた頃を思い出して書いた短章をご紹介します。

小林 それでは、その短章を朗読します。

## 揺れさだまる星

畔にモグラが棲んでいて、折角田に水を張っておいても、その穴からどんな下の田へ水が漏りだす。穴をふさいでも又すぐあける。

都会の人は畔とは単に田のしきり、区分だと思っているだろうが、あれは自分の田の水が下の田へ逃げないための守り壁なのである。

夕飯がすんでうす暗くなつてから私は見に行った。

うす闇の中にこぼこぼという音をたてて水が落ちている。私は道への芝草が厚い絨緞のように根をからませあっているのを丁寧に鋏で掘りとり、それを穴にあてがい泥で修繕した。

すっかり仕事すすむ頃、空には星が出はじめ、私は闇の中に一人たたずんだ。

水の音がまだ聞こえるかどうか私はじつと耳を澄ませていた。

すると私の向いあっている東の熊山の頂上に、誰かが炬火を振っている。星にしてはあまりに大きな光。それにぼつと月の出のようにまわりが赤らんでみえる。そして何かの合図のように大きくゆれている。でも誰が何のために今頃炬火を振るのだろうか。

あやしみながら私は見ている。

ゆれている炬火は次第におさまった。すこしずつ山をはなれ、それは空中

にのぼりだした。

それはやっぱり星だったのだ。

その夜私は夜ふけて一人伊東静雄の詩を読んでいたら、あたかもその星について、彼はすでに書いているのであった。

「いちばん早い星が空に輝きだす刹那はどんなふうだろう。

それを誰がどこで見ていたのだろう。

そしていまわたしが仰ぎみるのは揺れさだまった星の宿りだ」

(「夜の葦」)

もし私がこの夕べ星の出を見なかったら、もしこの詩を読むのが一夜早かったら、たとえ私が彼の詩を読んでも見知らぬ人のように気づかずこの言葉を通り過ぎてしまったにちがいない。いま私は誰よりも私はその意味に近づいた。

私は小学生のように手をあげて云うだろう。

「はい、私は見ていました、星がどのように揺れまどいながら地の殻をぬぎすてて空にのぼるかを。」

そうだ、私は見ていたのだ、偶然に、モグラの故に、芝草の故に。

(『短章集 蝶のめいてい／流れる髪』詩の森文庫 思潮社 二〇〇七年二月)

**小林** 私は赤磐市松木の永瀬清子さんの生家を何度か訪ねたことがあるので、松木の水田の風景と星が輝く様子を、思い浮かべることができました。「揺れまどいながら」とか「揺れさだまる」という表現から、星がまたたいている様子を私も見ているような、疑似体験

したような気持ちになりました。白根さん、この短章の締めくくり「モグラの故に、芝草の故に」とありますが、永瀬さんが農業をしていた故に、揺れさだまる星を見ることができた、というふうに私は感じましたが、いかがでしょうか。

**白根** はい、その通りだと思います。永瀬さんの詩は目に見えるように書かれているので、そんなふうに疑似体験できるところも魅力です。永瀬さんは、農業を通じて自然や地域の方にいろいろなことを教わり、その詩をいっそう豊かに育んでいきました。

**小林** どうして永瀬さんは、田畑を作ることになったのでしょうか。

**白根** 永瀬さんの家は地主だったので、農地改革で田畑を返してもらい、終戦の翌年から初めての農業に携わることになりました。もう詩は書けなくなるかも思っていたら、農作業中にいろいろ空想することができたので、たくさんの詩や随筆が書けたそうです。

**小林** そうなんですね。この短章もまさにそうですね。永瀬さんが作っていた田畑は、どの辺りなんですか。

**白根** 「沖ノノ」という永瀬さんの生家の近くと、「廻リト」という永瀬清子展示室のあるくまやまふれあいセンターの近くです。この短章「揺れさだまる星」では、田植えのために水を引いた夜に伊東静雄の詩を読んだところ、まさにその詩の世界が、自分の目の前に現れていた驚きを書いています。

**小林** 永瀬さんが書いているように、一夜早くても遅くても気づかなかったかもしれませんよね。その偶然を、とても喜んでうれしくて、だれかと共有したい！という気持ちだったのかなと想像します。

**白根** これは永瀬さんが、「いろんな事を知らないでいる人と知っている人とは、同じ道を歩いても深さがちがう」「つらい世の中を忍耐してゆく時にも、小さなよるこびを知っている人は強い」と考えていたからこそ、感じる事ができたんだと思います。

**小林** 永瀬さんの詩に惹かれるのは、そうしたまなざしで書かれていくからかもしれないですね。

**白根** そうですね。永瀬さんの詩を読んだり、星や植物などに親しんだりして、小さな喜びを見つけて暮らしていくことは、大切にしていきたいことだと思います。

**小林** そうですね。一般公開が始まっている永瀬清子さんの生家の辺り、これから田に水を引く作業が始まるということです。ぜひこの短章にもあるような景色を想像してみるのもいいかもしれませんね。白根さんもご覧になったという、見事に生まれ変わった永瀬さんの生家をご紹介します。一般公開は、五月十八日から始まっておりまして、入場料は一人三百円です。ただこちらは、NP O法人永瀬清子生家保存会の皆さんがボランティアで運営なさっているのですが、常にこちらにどなたかがいらつしゃるといってわけではありません。ですから見学なさる際は、必ず事前に電話で予約をお願いします。しばらく緊急事態宣言ということですから、ちょっとお出かけは控えている方も多いと思いますが、緊急事態宣言が開けたらお出かけいただきたいですね。

**白根** はい。永瀬清子さんのふるさと赤磐市に皆さんがお越しくださることをお待ちしております。

**小林** 白根さん、今日もありがとうございました。

**白根** ありがとうございます。

※二〇二二年五月十六日から六月二十日まで新型コロナウイルス感染症拡大防止のため岡山県に緊急事態宣言が発出されました。

※記載されている情報は、二〇二二年五月三十一日現在のものです。

〈参考文献〉

永瀬清子「松木村より（一）草の花」『文学研究』第一卷第二号（九月号）一九

四六年十月

永瀬清子「新しい生活」『すぎ去ればすべてなつかしい日々』福武書店 一九九

〇年六月

熊山町史編纂委員会編『熊山町史大字史』熊山町 一九九三年十月